

明治43（1910）年、親鸞聖人650回御遠忌の時、第22世現如上人の御染筆による『六字城』の額が、本堂正面に掲げられました。が、まさしく別院が石山本願寺以来の伝統であることを示している証拠です。

しかし誠に残念にも、昭和20（1945）年6月の空襲にあって灰燼に帰しましたが、戦後いち早く、昭和25（1950）年に仮本堂を建立し、昭和34（1968）年に大阪読売テレビの発足にあたり、テレビ局に境内を分割貸与し、その翌年、昭和35（1969）年に本堂の復興が出来ました。

以来31年、本堂のみの状態で今日に及びましたが、蓮如上人500回御遠忌を迎えるにあたり、別院の機能を充実いたすべく、有縁の方々のご協力を得て、本堂及び諸施設の整備に着手、平成12（2000）年5月に今の本堂・庫裏の再建を見るに至りました。

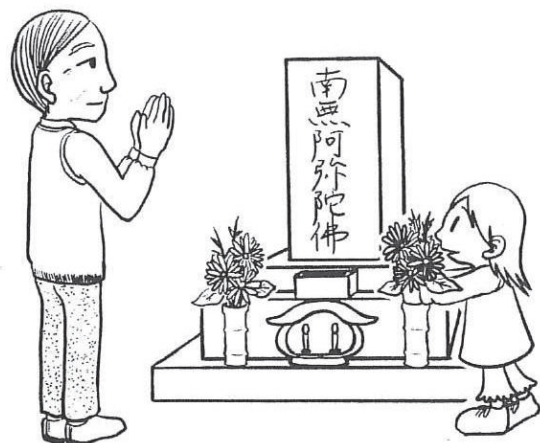
平成27（2015）年10月には親鸞人750回御遠忌を厳修し、昨年（2018）年10月には、門首後継者 大谷暢裕師 御参修のもとに報恩講が厳修されました。

## Q&amp;A

## どうして「ん」するの？

## 第2回

## 墓石の文字は南無阿弥陀仏？



を感じる場であると同時に、「教えとの出会いの場」であります。私たちは、大切な人との関係性から、迷うことなく「特別」を感じる墓石に手を合わせます。しかし、その周りにある、自分とは関係がないと感じる「その他多くの墓石」とも、地面ではしっかりとつながっています。

## 答え

お墓は、時代や地域によって様々ではありますが、私たち真宗門徒は、墓石に「南無阿弥陀仏」または「仏説阿弥陀經」にありま「俱会一処」（俱に一つの処に会する）という言葉正面に刻みます。一般的によく使われる「〇〇家」を意味する文字は、台座の部分などに刻みます。

お墓は、大切な人とのつながり

私たちは、目の前の関心事に心を奪われますが、私という存在は、永遠の過去から誰一人途切れることなく届けられたいのちを生き、今、現に踏みしめている大地に支えられ成り立っています。

墓石に、限りなきいのちと光を意味する「南無阿弥陀仏」と刻むことには、お墓参りをご縁に、永遠の歴史と、限られた一つの家系にとどまらない広大無辺なるつながりに包まれ支えられ続けている自分に出遇い、そのことを教えてくれるはたらきに手を合わせることが願われています。

（第7組 教應寺 建部 智宏）

## 報告

## ◆別院院議会開催のご報告

去る3月30日（土）、天満別院責任役員会及び院議会が開催されました。左記の通り議案の審議が行われました。

記

- ・2018年度 經常部及事業部会計 第二次補正予算
- ・2019年度 教化事業目標・重点的施策
- ・2019年度 經常部及事業部会計 当初予算

- ・別院就業規則の改正
- ・別院諸会場使用冥加金の改定

以上

全議案、両会とも全会一致で可決承認されましたことをご報告いたします。

詳細につきましては、いつでも別院に問い合わせてください。尚、門徒会の皆様には、後日改めて「六字城」折込にてご報告いたします。

## ◆合唱団「みのり」始動！！

天満別院では、去る4月20日（土）の午後2時から合唱団『みのり』が開催されました。

『みのり』の活動は、今年度からの取組みで初めての活動でした。

## 六字城

## ◆4月 定例法話開催の報告

（讃歌練習18名の方々）



輪番挨拶に始まり、お勤めの後には皆さんの自己紹介がなされ、村上奈津子先生指導のもと、まずは仏教讃歌を、その後、童謡を歌いました。終始、和やかな雰囲気の中で会は終わりました。

次回は5月18（土）の午後2時に開催が予定されています。男女問わず関心のある方、未経験の方でも大丈夫です。参加費は無料です。ぜひご参加ください。

きました。

師は今の時代、除災招福は罪福の信者といわれ、親鸞聖人は念佛の教えではないと戒めておられ、「夜があけて太陽があがるのか、太陽があがって夜があがるのか」という覚如上人の「執持鈔」を引用されて、「如来さまの光に照らされて我身の闇が破れる」と言われています。例えば「千歳の闇室に、光もししばらく至ればすなわち明朗なるがごとし」『教行信証』と述べられ、私達は誰と比べようもない、一人ひとり尊い「いのち」をいただいている「存在の尊さ」に気づかせていただいています。具体的には「お内仏のある生活」を取り戻すことです。

師は「亡き人の御恩をいただいで、私にかけられているいのちの願いに生きていきましょう」と穏やかにして温かい御法話をいただきました。



## 輪番雑感

## 新元号「令和」から感じること

輪番 武宮 信勝

厳しい寒さをのり越え、穏やかな春の日差しに促され、さまざまな花が一斉に咲きほころぶ時節となりました。新元号「令和」が施行され、なんでも1300年の奈良の昔、公卿にして一流の歌人、大伴旅人が九州・大宰府の公邸で、招かれた31名の酒宴の席で述べた挨拶の言葉「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、欄は珮後の香を薫らす」は日本最古の歌集『万葉集』を典拠としたとされている。

安倍晋三首相は記者会見で「厳しい寒さの後に見事に咲き誇る梅の花のように、一人ひとりの日本人が、明日への希望と共に、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そうした日本でありたいとの願いを込めた」と述べている。

皇位継承前の元号発表は憲政史上初めて、しかも、中国の古典からでなく、初めて国書からの典拠。「黒衣」の存在など、聞けば聞くほど驚くところが多いが、問題は元号の改定によって社会・人間の生き方が直ちに変わるものでは

ないということであろう。「平成最後」とか「令和最初」とかという言葉が蔓延している。ただ一つ、確かなことは、一人ひとりの人間である私は私であって何ら元号によって変わるものではない。「令和」は平和にならしめよという言葉にも読める。親鸞聖人が聖徳太子を「和国の教主聖徳皇」と仰がられた。その太子の17条憲法「和らかなるをもって貴し」とし、そこに至るご精神は、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。」に依ると言われている。

今の私の「令和」のとらえかたは、生活の中で、どこどこまでも阿弥陀仏の御命令として、三宝に帰依し続けていくことであります。何ら変わることのない私が仏・法・僧に帰依することによって真に「念仏者」として誕生せしめられるのであります。念仏者の誕生とは、生きづまりの多い私の生活が、生きづまらなくてもいい、見直しの人生が始まったということでしょう。更に申すならば、そのことに依ってのみ世の中が安穏なる社会が成就するのであるといたでくのであります。

まさしく、仏法ひろまれ、世の中安穏なれであります。